

## 学位論文の要約

論文題目 多言語状況における境界の形成と変容：フィジーのろう者をとりまく多言語状況と言語イデオロギーにかんする文化人類学的研究

申請者 佐野 文哉

### 論文要約

本論文の目的は、筆者が2013年から2020年にかけてフィジー・ヴィティレヴ島で行ってきた計22か月の現地調査にもとづいて、フィジーのろう者の「ことば」をめぐる状況を彼らが用いるさまざまな記号レパートリーに注目して詳細に描きだすとともに、そうした状況が言語イデオロギーの介在によって動的に揺れ動くさまを民族誌的に明らかにすることをとおして、多言語状況や言語イデオロギーにかんする議論を再検討することである。

本論文は全8章で構成されている。章題はつぎのとおりである。「第1章 序論」、「第2章 フィジーにおける手話およびろう者コミュニティの現状と形成史」、「第3章 手話やろう者コミュニティにみられる地域差」、「第4章 フィジーのろう者をとりまく多言語状況」、「第5章 フィジー手話の公用語化に向けた取り組みとDEAF LANGUAGEの推進」、「第6章 「正しい手話」をめぐるイデオロギーの多様性と言語的差異化」、「第7章 「自分たちの言語」への関心の高まりと記号レパートリーの境界の変動」、「第8章 考察と結論」。

第1章では、多言語状況にかんする先行研究、言語イデオロギーにかんする先行研究、ろう者や手話にかんする先行研究を順番に概観し、本論文の視座と理論的位置づけを示す。多言語状況にかんする研究は、ダイグロシアやコードスイッチングに代表されるような言語間の境界を前提としたアプローチから、言語レパートリーや複言語主義、トランスランゲージングなどのような話者が用いるさまざまな記号的資源を「単一の全体」として捉える複言語的なアプローチへとその視座を拡張してきたが、後者には、言語の「複数性」の問題やその動的変化の問題、言語の社会指標的価値の問題をうまく扱えないという問題点が指摘できる。そこで本論文では、言語イデオロギーの視座を導入し、具体的な社会文化的状況を生きる多言語話者の言語実践をめぐる動態を捉えるための視座の確立を目指す。ただし従来の言語イデオロギー研究にもある一定の傾向性とそれに付随する問題点が指摘できる。それは観察者が目撃したことばをめぐる状況あるいは歴史的な事実を固定的な軸として、そうした現実が言語イデオロギーの介在によっていかに社会的に（再）構築されているのかを論じてきたため、言語イデオロギーがあたかもことばをめぐる現実の安定的な構築や「再生産」のための機構の一部であるかのように扱われてきたという点である。そうした問題点を克服するために、本論文ではフィジーのろう者や手話関係者の言語イデオロギーおよびそれによって促される実践の多様性や流動性にも注目することで、いかに彼らの言語イデオロギーがことばをめぐる現実の安定的な構築に（部分的に）失敗しているかを示し、

それをとおして多言語状況や言語イデオロギーにかんする議論を再検討する。ろう者や手話にかんする先行研究のレビューでは、ろう者や手話をとりまく状況の世界史的な変遷を跡づけた後、ろう者の多言語使用や言語イデオロギーを扱った先行研究を概観し、ろう者や手話をめぐってこれまでにどのような問題が指摘されてきたのかについて整理する。

第2章では、フィジーの手話やろう者コミュニティの現状とその形成史を概観する。現在のフィジー手話およびろう者コミュニティは、さまざまな国や地域の手話やろう者、手話関係者との接触の結果形成されたものである。まず手話に注目すると、オーストララジア手指英語 (Australasian Signed English : ASE) を原型とするフィジー手話には、さまざまな国や地域の手話の影響がみられ、いわば「他言語性／多言語性」が刻み込まれていることがわかる。一方、現在のフィジーのろう者コミュニティも、ニュージーランド国籍をもつ難聴の白人女性によるろう者のクリスチャンコミュニティの形成や、ナイジェリア人ろう者の主導によるろう学校やフィジーろう者協会 (Fiji Association of the Deaf : FAD) の設立などといった取り組みのなかで形成されたものであり、そうしたさまざまな国や地域の人びととの交流をとおして、フィジーのろう者コミュニティには海外の言説や実践が流入してきている。

第3章では、フィジーの手話やろう者コミュニティにみられる地域差について概観する。ヴィティレヴ島のろう者のあいだでは「(首都) スヴァ」対「西部」という独自の地域・集団区分がみられる。これはフィジー一般にみられるヴィティレヴ島の東西の違いを一部反映したものであるが、それ以上に、東西のろう者をとりまく教育・社会環境の違いや手話の違いを背景としたものである。そうした東西のろう者や手話をとりまくさまざまな違いは、決して両地域のろう者や手話の「優劣」や「正誤」を表したものではないが、フィジーのろう者や手話関係者の認識では、東西のろう者の「内在的性質」の違いや手話の「真正性」の違いを反映したものとしてイデオロギー的に解釈されており、そうした認識は、第6章で詳しくみるように、フィジーのろう者の実践を方向づける資源ともなっている。

第4章では、フィジーのろう者が用いるさまざまな記号レパートリーについて、彼ら自身のメタ言語的な認識と筆者の観察にもとづいて詳述する。フィジーのろう者が用いる記号レパートリーは「SIGN (=フィジー手話)」、「OWN SIGN (=慣習的ジェスチャー)」、「ORAL/LIP-READING (=口話)」、「書記言語」、「海外の手話」の五つに大別される。SIGN は英語の影響の程度に応じてさらに独自の文法を有する「DEAF LANGUAGE」と、いわゆる手指英語 (英語対応手話) にあたる「ENGLISH SIGN」に分けられる。彼らはこうしたさまざまな記号レパートリーを相手や状況に応じて使い分けているだけでなく、ときに「混用」しながら他者とやりとりを交わしている。またさまざまな記号レパートリーを使用するのはろう者の聴者の家族や友人、仕事仲間も同様である。彼らの日常的なやりとりはこうしたさまざまな記号レパートリーによって成り立っているのであり、いわば複数の記号的資源が重なり合う複言語的な状況こそが、フィジーのろう者とその周囲の人びとにとっての常態であるといえる。

しかしこうしたフィジーのろう者のことばをめぐる状況は決して固定的なものではなく、言語イデオロギーの介在によって動的に揺れ動いている。第5章から第7章にかけては、フィジーのろう者の言語実践をめぐるイデオロギーとその再帰的な影響について考察する。

第5章では、首都スヴァにある FAD に所属するろうの若者たちの取り組みに注目し、その背後

にある言語イデオロギーとその影響について考察する。近年、スヴァの FAD の若いう者はフィジー手話の公用語化と普及、そして統一に向けたさまざまな取り組みを行っており、それは国会中継に手話通訳を導入させたり、手話やろう者の認知度を高めたりと、対外的には一定の成功を収めている。しかしそうした取り組みで「フィジー手話」として喧伝されるのは、彼らが SIGN (手話) と呼ぶ記号レパートリーのなかでも DEAF LANGUAGE のみであり、またそれは英語との差異が過度に強調されて表象される。こうした取り組みはフィジーのろう者の言語実践の多様性や DEAF LANGUAGE における英語的な文型の存在を不可視化し、結果として彼らの記号レパートリーのあり方にも影響を及ぼしている。

第6章では、ヴィティレヴ島の東西のろう者の「正しい手話」をめぐるイデオロギーの違いとそれが彼らの言語実践に与える影響について考察する。手話の統一を志向する FAD の取り組みとは裏腹に、西部の一部のろう者は手話の差異化に向けた取り組みを行っているが、その背景には「正しい手話」をめぐるイデオロギーの違いがある。「スヴァの手話はアメリカ手話の影響を受けている」と語り、ASE を「本来のフィジーの手話」として重視する西部のろう者は、「海外の手話」の影響を排した手話表現を新たに作成し、それを自ら主催する手話教室で教えることで、「間違っただのスヴァの手話」とは異なる「正しいフィジー手話」の普及を目指している。しかしこうした西部のろう者のメタ言語的な見解は、必ずしも実際の言語状況を「正しく」捉えたものではなく、むしろ ASE を原型とするフィジー手話に内在する「他言語性／多言語性」を「消去」という結果をもたらしており、それは手話やろう者コミュニティ内部の多様性や「地域差」を再帰的に形成・強化している。

第7章では、フィジーのろう者が手話以外の記号レパートリーに対して抱く認識について分析し、そうした認識のもとで彼らの記号レパートリーの境界が揺れ動く様子を明らかにする。フィジーのろう者はフィジー語などの現地語に対して、たとえそれを自分自身が理解し使用することができなくとも肯定的な態度を示す。その背景には、フィジー国内の社会情勢や海外留学経験に影響を受けた「自分たちの言語 (OWN LANGUAGE)」への関心の高まりというコンテクストがある。こうしたコンテクストのなかで、彼らが OWN SIGN と呼ぶ慣習的ジェスチャーに対する認識も変化しており、かつては「手話ではないもの」として否定的に捉えられていた OWN SIGN は、一部のろう者のあいだで、ASE を原型とするフィジー手話とは異なる「土着の手話」あるいは真の「フィジー独自の手話」とみなされるようになった。そこでは「言語／非言語」の境界を含む記号レパートリーの境界やそのあり方が揺らいでいる。

第8章では、これまでの議論を整理したうえで総合的な考察を行なう。フィジーのろう者のことばをめぐる状況は、記号レパートリーの多様性やアイデンティティの複層性を背景とした多様かつ流動的な言語イデオロギーの介在によって動的に揺れ動いており、さらにそうして形成されたことばをめぐる状況が新たな言語イデオロギーの形成を促している。こうした絶え間ない動態的過程のなかにある彼らの言語実践のあり方や、それを促進し、ことばをめぐる状況をつねに新たな可能性へと開く言語イデオロギーのあり方は、従来の研究では描かれてこなかったものであり、本論文の議論をとおして、多言語話者の言語実践をよりダイナミックな観点から理論化することが可能になる。